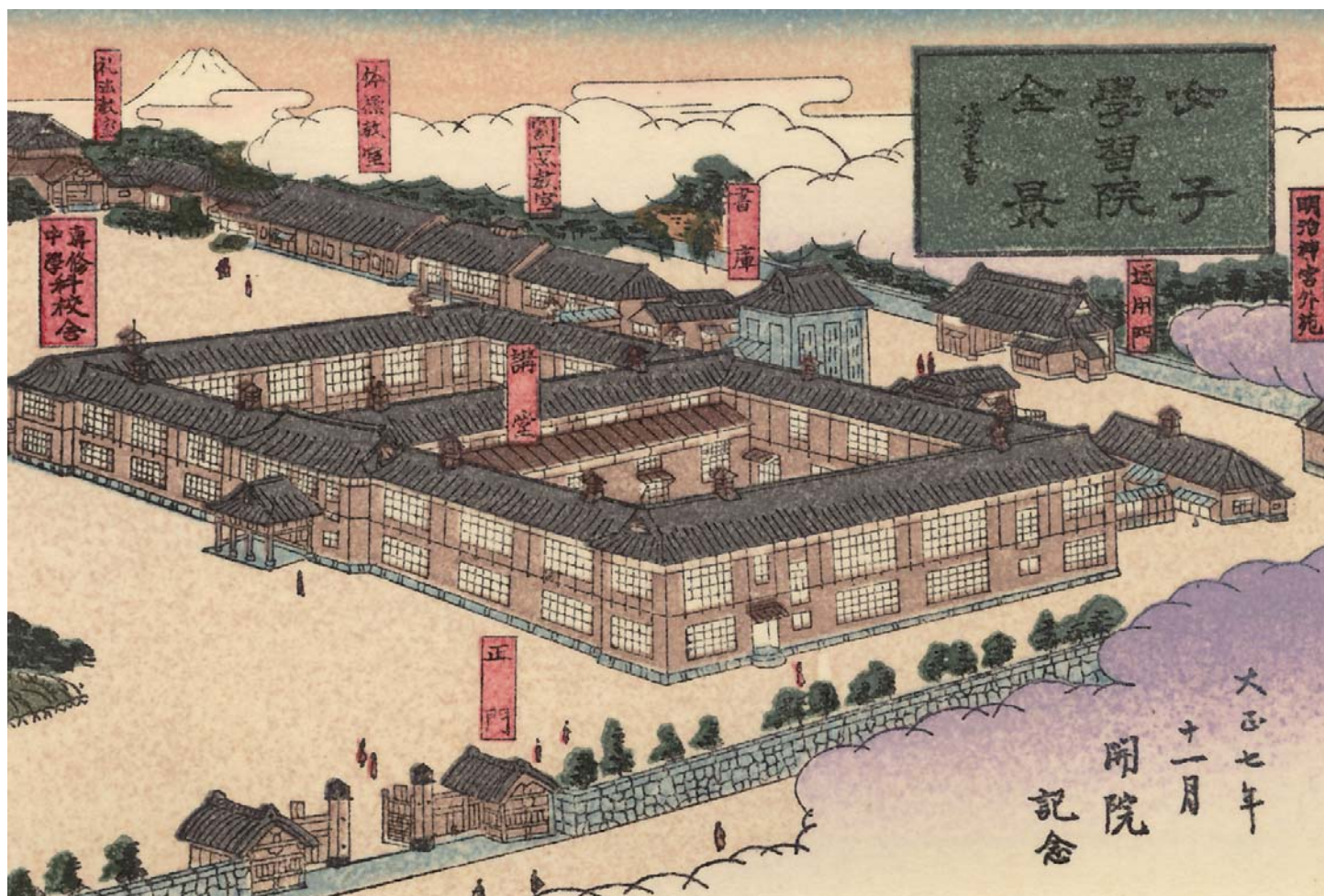


学習院アーカイブズ ニューズレター

09

Gakushuin Archives Newsletter 2017.2.20 vol.



開院記念絵はがき 女子学習院全景 (2枚一組のうち、右側の1枚)

原画は女子学習院開院記念として1918 (大正7) 年に常磐会が作成。岡野栄教授画。1975 (昭和50) 年に創立90周年記念品として復刻された。手前に描かれた石塀が、現在も青山の秩父宮ラグビー場バックスタンド側に遺されており、百年の時の流れを見つめている。

2020年東京オリンピック・パラリンピック等に係る地域開発により、今後の行方が心配される。

Contents

学習院戸山キャンパスの発掘調査と遺された資料 新宿区 文化観光産業部 文化観光課 諸星 真澄	2
安藤正人教授講演「現代社会におけるアーカイブズの役割」 桑尾光太郎	4
「女子学習院開院記念絵はがき」を糸口に 近藤 順子	6
文書ファイルの整理・管理について 井上 素子	7
主な活動 (2016年7月～2017年1月)	8

学習院戸山キャンパスの 発掘調査と遺された資料



新宿区 文化観光産業部 文化観光課 諸星 真澄

戸山キャンパスの発掘

学習院女子大学、女子中・高等科のある戸山キャンパスは東京都新宿区に所在する。平成26年12月、女子中・高等科の総合体育館建設計画に伴い、筆者が勤務する新宿区役所宛てに埋蔵文化財の有無に関する照会があった。当地は江戸時代、尾張徳川家の広大な下屋敷の一角にあっており、周知の埋蔵文化財包蔵地として登録されているため、建築に際し、文化財保護法に基づく届出が必要な旨回答し、合わせて、試掘調査の協力を求めた。その後、試掘調査により遺跡が確認されたため、本格的な発掘調査が実施される運びとなった。

発掘調査の内容については、調査報告書¹が刊行されているし、また『学習院輔仁会雑誌』²にも分かりやすく紹介されている。よって、ここでは本誌の趣意に即して、今回の調査における考古学的成果と遺された資料（絵図）との関係を著し、資料を遺すことの重要性に加えて、考古学と他学問とのつながりについて述べられればと思う。

尾張徳川家下屋敷「御花壇」の発見

尾張徳川家の下屋敷は寛文8年（1668）、尾張徳川家2代藩主光友が和田戸山の地に土地を購入したことに始まる。その広さは約43万㎡にも及び、江戸時代において随一の規模を誇る大名屋敷であり、その趣向を凝らした庭園は「戸山荘」と呼ばれ、有名であった。庭園は屋敷地のほぼ中央に大池を配置する池泉回遊式庭園で、今回の調査地点は屋敷の北東部、大池の北側に位置する。

冒頭で触れたように、遺跡の有無を確認すべく、



試掘調査

平成27年3月末から4月にかけて試掘調査が実施された。その結果、6か所設定した試掘坑のうち、3か所の試掘坑から数本の溝状の遺構が発見

された。それらの溝はそれぞれ平行しており、列をなして並んでいる様相が想像できた。そこで、注目されたのが以下の3点の資料（絵図）である。

資料①「山御屋敷御花壇ノ図」

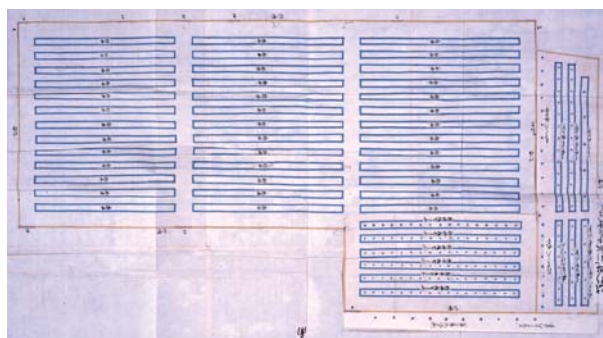
（徳川林政史研究所 図物甲577）

資料②「山御屋敷御花壇之絵図」

（名古屋市蓬左文庫 497）

資料③「山御屋敷御花壇取広ノ図」

（徳川林政史研究所 図物甲578）



資料③「山御屋敷御花壇取広ノ図」（徳川林政史研究所所蔵）

これらの絵図は尾張徳川家下屋敷にあったとされる「御花壇」を描いたものとして知られていた³。しかし、そこには「御花壇」周辺の建物名称が記されており、おおよその位置は把握できていたものの、詳細な地点は不明であった。また、絵図によって、花壇の畝の本数や長さに差異があったため、別の花壇を描いたものか、同一の花壇を描いたものなのかも不確定であった。さらに「御花壇」についての記述がこれら以外の資料に認められておらず、その存在も含めてははっきりしたことは分かっていなかった。

以上のような疑問点の解明を発掘調査のテーマの一つとしながら、平成27年8月から4か月にわたる調査が進められた。その結果、試掘調査において部分的に確認していた平行な溝が次々に検出され、上掲の資料に符号するように展開していったのである。

もし、これら3点の資料が遺されていなかったとしたら……発掘調査のみによって考古学的に明らかになってきたことは、長細く延びる溝が整然と並ぶこ



「御花壇」調査風景

と。その溝は数段階の改変および拡張がなされていること。溝を構成する覆土は粒子が細かい黒褐色土を主体

とし、混入物も少ない客土であったため、栽培等に適した土であったと予想できること。遺物の出土状況からおそらく18世紀中葉頃には廃絶されたことなどである。

しかし、それらの溝は遺されていた資料によって、尾張徳川家の「御花壇」であると特定することができた。もちろん、尾張徳川家下屋敷における初の検出例であり、かつ、全国的にも大名屋敷の花壇という貴重な調査例となり得た。その一方で、発掘調査によって溝の段階的な改変・拡張の証左が得られたことで、3点の資料はいずれも同じ花壇に関する絵図であり、①→②→③の順で変遷していることが判じられた。出土遺構と遺された資料が見事に合致するだけでなく、考古学的成果によって資料の裏付けがなされたという意味で双方とも幸運であったと言えるだろう。

ちなみに、資料③の花壇にはそれぞれの畝に植えられていた栽培品種名が記載されている。大部分は「牡丹」であり、「はまなす」「しゃくなげ（シャクナゲ）」などの花名も見られる。そのため、調査中に花壇の土の採取をおこない、科学分析をおこなった。しかしながら、資料に記されているような花の種子の残留は認められず、この件に関しては残念であった。この分析でも良好な結果が得られたな

らば、さらに資料の真実性が高まっただろう。

考古学と遺された資料

東京都心で発掘調査をする場合、近世以降には文献や絵図などの資料が少なからず遺されているため、「ここは元々、〇〇寺があった場所だ」とか「ここは△△家が拝領していた土地だ」と認識し調査をおこなっている。しかし、遺構や遺物にその名前が書いてあるわけではないので、資料によれば〇〇寺、△△家の遺跡だろうと推しはかる。それに対して、今回発見された溝は遺された資料により、明らかに尾張徳川家が構築した「御花壇」と結論づけることができた。考古学的成果と遺された資料がうまくリンクできた好例と言えよう。

考古学において、発掘調査で得られた情報をどう解釈するかということが大事な焦点となる。その中で今回の調査のように他の資料とリンクできたのは、資料自体が遺されていることも当然ながら重要であるが、これらの資料に対して、文献史学の分野での研究がなされていたことが要用であった。考古学とは、過去の人間の生活・文化を遺構・遺物などを通して研究する学問であり、広い意味の歴史学の一分野であると言われる。これまで、考古学と文献史学、建築学、民俗学、地質学、人類学、生物学などのさまざまな学問との学際的な研究の必要性がとなえられてきており、それが歴史復元につながることは言うまでもないだろう。歴史学の一端を考古学が担うために、遺跡を掘り、遺物を見つけるだけという「発掘屋」と言われないように、他分野の学問と関係を密にし、あらゆる角度から遺跡に向き合い、理解していかなければと改めて思う。



調査区全景

註

- 1 株式会社 四門『尾張徳川家下屋敷跡Ⅸ』- 学習院女子中等科・高等科総合体育館改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 - 2016
- 2 輔仁会雑誌編集委員会『学習院輔仁会雑誌』第240号 2017
- 3 渋谷葉子「尾張徳川家江戸屋敷～市谷・麹町・戸山～絵図集成」新宿歴史博物館平成18年度特別展『徳川御三家 江戸屋敷発掘物語』- 尾張家への誘い - 展示図録 2006

発掘調査写真提供：新宿区／株式会社 四門

安藤正人教授講演 「現代社会におけるアーカイブズの役割」

桑尾 光太郎

2016（平成28）年12月6日、学習院アーカイブズ講演会が目白キャンパス中央教育研究棟402教室において開催され、学習院大学大学院人文科学研究科アーカイブズ学専攻の安藤正人教授に表記の演題でご講演いただいた。以下、安藤教授のご了解をいただき講演の概要を記す。

アーカイブズとは何か

2016年は太平洋戦争開戦75年・戦後71年にあたり、「戦争の記憶」をいかに語り継ぐかが課題となるなか、「記録のもつ力」がいかに大きいかを感じる機会が多い。学習院大学大学院アーカイブズ学専攻は2008（平成20）年の開設以来、「記録を守り、記憶を伝える」をキャッチフレーズとしている。記録のもつ力を信じ、その力をしっかりと伝えていくことが、アーカイブズの役割でありアーキビストの任務である。このことを開戦75年にあたって改めて強く思う。

アーカイブズの古典的意味にふれると、その語源は古代ギリシャのアルケイオン（アルコン＝統治者の館）にあり、国家や統治者にとって支配の基盤あるいは権力の証となる重要な記録、もしくはそれを保存する施設を意味する。古代ローマ帝国のタブュラリウム（公文書館）は紀元前に造られ、建物の基礎は14世紀にローマ市役所としても使用された。アーカイブズは統治の基礎となる国の重要な機関であり、その伝統を象徴的に引き継いでいるのがギリシャ神殿を模した建築の米国国立公文書館で、米国憲法や人権宣言はじめ重要な記録を保存している。

現代社会におけるアーカイブズは、古典的な意味からさまざまな広がりをもつようになった。都道府県・市町村の地方自治体から企業・団体・学校ほかの組織にアーカイブズが設けられ、学習院アーカイブズのような大学アーカイブズも増えてきた。これまでのアーカイブズ学専攻学生の研究テーマをみると、文化・芸術分野のみならず自然科学、社会・福祉など多様な分野のアーカイブズが対象となっている。アーカイブズの現代的意味を確認しておく、①組織や団体から個人にいたるまで、人間が行うあらゆる種類の活動から生み出された記録のうち、情



報資源として価値があるため永続的に保存・活用される記録（物）のこと。記録化された情報であれば、文字情報から図像、映像、音声、デジタルデータまで、その形態や媒体を問わない。②アーカイブズを情報資源として保存し、利用に供するための施設やシステム、ということになる。

情報資源としてのアーカイブズ

—文化資源・社会資源・組織資源—

情報資源としてのアーカイブズには、①文化資源、②社会資源、③組織資源としての意味がある。文化資源・歴史資料としての事例を紹介すると、まず江戸時代の公文書である松江藩郡奉行所の民事裁判記録には、庶民の生活の様子がわかる詳細な情報が記載されている。続いての事例は富山県庄下村の兵事係文書で、村の人々の徴兵に関する克明な記録である。兵事に関する公文書は敗戦直後に処分命令が出されて大部分が廃棄されたが、庄下村では役場の担当者が隠匿して保存していた。3番目の事例のオーストラリアに接収された戦前期の在豪日本企業記録は、段ボール約3500箱がオーストラリア国立公文書館に保管されている。日本人の海外進出や海外における活動を知ることができる記録で、日豪共同による整理が進められ、日豪両政府の合意により日本の国立公文書館に寄贈される予定である。

今回強調しておきたいのは社会資源としてのアーカイブズである。2000年代に入って消えた年金記録の問題、薬害C型肝炎の報告書、外交密約文書等々、

記録に関する社会的な問題が頻発し、国の記録管理のまずさが指摘されている。事例として中国残留日本人孤児問題を挙げると、孤児のなかには戸籍などの記録が確認できないため、厚生省に申請を行っても日本人として認められない人々がいる。残留孤児が日本に生まれたことを示す何らかの記録が出身地などに残されていれば、問題は簡単に解決するはずである。愛媛県城川町魚成村（現西予市）は、かつて村民の半数が満州に移民し、移民や帰国関係の記録が西予市城川文書館に保存されている。しかし日本各地のそうした記録は、敗戦時や町村合併時に廃棄されるケースが多く、残されていたとしても未整理のために存在が確認できない事例もある。また、ハンセン病の療養所入所者に対して補償を行う事業が話題となったが、旧植民地の療養所にいた入所者の記録が残されておらず入所の証明ができないという。日本における記録管理の現状は貧しいと言わざるを得ないが、アーカイブズは、こうした事態に的確に対応するためのシステムである。

「消えた年金記録」や中国残留孤児、ハンセン病患者の問題が示すのは、過去の記録（アーカイブズ）は、単なる歴史資料や文化資源ではなく、個人の人權や生命の安全を守る社会資源としての意味をもつことである。社会資源としての重要性に目を向け、人權や生命の安全を守るために貢献することがアーカイブズの第一の役割であろう。

組織資源としてのアーカイブズに関しては、最近豊洲市場の問題が話題となっており、小池百合子都知事から説明責任・情報公開という言葉がしばしば発せられる。市場施設の建設にあたって地下部分の盛り土の省略をいつ誰が決定したのか、敷地や地下水の汚染検査は適切に行われていたのか等々の疑問が出ているが、これはまさに記録の問題である。そうした疑問を解決するためには、過去の行政文書によって検証され、それに基づいて今後の方向が決められる必要がある。説明責任（アカウンタビリティ）とは、口頭だけでなく証拠となる記録を示すことで成り立つ。そのためには都庁の文書管理および都公文書館のアーカイブズ保存が適切に行われているかが問われている。

災害対策、都市計画、河川・道路・橋梁工事、町並み保存等々、さまざまな行政活動の展開にアーカイブズは活用されており、市民の安全を守り豊かな暮らしを実現させていくために「組織資源」としてのアーカイブズは欠かすことができない。民間企業においても市場開拓や製品開発など企業活動の展開をはじめ、リスクマネジメントや内部統制といった

経営責任、企業としての社会貢献・社会的責任を果たしていくためにも、経営資源としてアーカイブズを活用することは必要となる。学習院のような大学においても同様であろう。

まとめ

以上述べてきたように、人間の活動あるところに必ずアーカイブズが存在し、行政や大きな組織のみならず人々の身近な活動の記録が、やがて重要な社会的意味をもつことがある。文化資源として学術・文化振興面での活用だけでなく、市民の権利を保障する社会資源としての活用ならびに、行政や経営を支える組織資源としての活用をはかることが、アーカイブズを情報資源として社会に役立たせるために重要である。アーカイブズが自分自身にも関わる世界だということを、改めて認識していただければ幸いである。

質疑応答ではアーカイブズを学校教育の中で活かしていくことの意義や、アーカイブズのデジタル化について質問があった。安藤教授からは、各地のアーカイブズでも子ども達の教育や地域教育の機会を重視し実践を重ねていることが述べられ、学習院アーカイブズからも学生生徒が実際に文書資料にふれる機会をもっていることが紹介された。また安藤教授は、アーカイブズのデジタル化は重要な課題でありその推進により利用の便宜を図ることができるが、それが第一義ではなく基本は記録現物の保存にあるとの見解を述べられた。

今回の講演会の趣旨は、事務職員を主な対象としてアーカイブズに関する理解を深めてもらうことにあった。会場には職員に加えて教員、アーカイブズ学専攻や文学部の学生・修了生、外部のアーカイブズ関係者ほか、82名の方々に参集していただいた。学習院アーカイブズでも、日頃さまざまな形態・内容の記録資料を扱い、閲覧や学内外からの問い合わせに対応している。学習院アーカイブズに残される資料も、これまでの学習院という場に関わった多くの人々の活動の記録である。それらを文化資源・組織資源として活用していくことはもちろん、安藤教授が強調されたように人々の権利や生活を守るための「社会資源」であることを改めて認識して、今後の業務にあたっていきたい。ご多忙のなか講師をご快諾いただき、アーカイブズが果たす社会的役割と存在意義をわかりやすく、かつ魅力的にお話していただいた安藤教授に深く御礼申し上げます。

（学習院アーカイブズ）

「女子学習院開院記念絵はがき」 を糸口に

今号表紙で紹介した絵はがきは、絵の緻密さに加えて大変味わい深い雰囲気を持ち、我々を惹きつける。画を担当した岡野栄教授について少し触れてみたい。



岡野栄（おかのさかえ）は、明治13（1880）年東京に生まれ、白馬会洋画研究所で黒田清輝に師事し、東京美術学校（現東京芸術大学）西洋画科にて学んだ後、明治41（1908）

年に学習院女学部¹に奉職した。その後、美術団体である白馬会の解散後に、現在も続く光風会を仲間7名と立ち上げ、学習院女学部と女子学習院¹においては主に洋画の授業を担当していた。

歴史を辿ると、白馬会や光風会で発表された西洋画の世界とは異なる、岡野の残した作品群の一部が見えてきた。それは女学部奉職から間もない頃に、児童文学の第一人者である巖谷小波と組んで制作した児童書の挿絵群である。その中でも、同じく光風会の発起人である小林鐘吉、杉浦非水と三人で担当した小型本『日本一ノ画噺』（にっぽんいちのえばなし（明治末～大正初）全35冊 中西屋書店）は、青や赤、緑などの単色地に白と黒のシルエットで動物などをシンプルに描いた、大変モダンで明快な作品である。このシリーズは近代絵本の傑作とも言われている。



『日本一ノ画噺・カチカチャマ』
明治44年（国立国会図書館蔵）

岡野が巖谷小波と作った『お伽手工画噺』（大正2年）には折り紙細工の仕掛けが施してあり、また「女学校すごろく」²や「少年飛行双六」では生き生きとした動作や表情を鮮やかな色彩で表現してい



「女学校すごろく」明治42年

る。これらの絵やアイデアがどれだけの人々を楽しませたことか計り知れない。他の絵本挿絵では、今回紹介した記念はがきと共通するような趣のある建物を描いたものもあり、更に美術教育者としても数冊の教材を出版している³。

広範囲に渡る創作活動を含め、宮内省在外研究員として1年間の欧州留学（大正14年）を挟んで、昭和17（1942）年に亡くなるまでの34年間、岡野は長きに渡り教鞭をとり続けた。同年の『おたより』⁴第86号では、「先生ほど多芸で、趣味の広い方は稀でありませう。御専門の洋画は固より、俳画や俳句にも独特の妙趣を發揮せられ、ご自身之を楽しまれるのみならず、僚友後進にも広く嘉恵を頒たれました」、「先生に接する者は、まづその高風に打たれ、ついでその和気に親しみ、厚誼に感じ、自ら敬重と信倚とを寄せるに至りました」等々、岡野の死を悲しみ惜しむ声が多く、熱く綴られている。基礎から身につけた高度な技術の上に自由な発想を持ち、生徒達に対しても型にはまらない指導をしていたであろうことが想像出来る。奥行きのある豊かな指導を受け、生徒達はそれぞれの可能性の芽を膨らませていったに違いない。

今後も更に深く見ていきたい。

注：1 明治39（1906）年より華族女学校から学習院女学部、大正7（1918）年より女子学習院となる
2 「女学校すごろく」（明治42年）『少女世界』附録 博文館
3 『学校家庭萬有図画全集とその描き方』（昭和4年）、『実習教材略画の描き方』（昭和11年）
4 大正9（1920）年から昭和19（1944）年まで、女子学習院が家庭との連絡のために発行していた小冊子

（学習院アーカイブズ 近藤順子）

文書ファイルの整理・管理について

—現況報告—

学習院の事務部署が、統一的な方法・手順に基づく学内事務文書の整理・管理を開始した平成24年度末以来、4年が経とうとしています。本稿では、平成27年度から現在までの約2年間の取組みと今後の課題についてご報告します¹。

「文書ファイル管理簿」の作成・更新

各部署における「文書ファイル管理簿」（以下「管理簿」と表記。）の作成と更新は次第に定着しました。平成27年度分の管理簿に各部署が登録した文書ファイルの冊数と、学習院アーカイブズ（以下、「私達」と表記。）が管理簿を受領した部署の割合は、表1のとおりです。

表1：平成27(2015)年度版 文書ファイル管理簿 受領状況
平成28(2016)年12月現在

事務部署区分	登録数 ^{*2}	依頼数	受領数	受領率 ^{*3}
法人部門	9,339冊	12件	12件	100%
大学	11,788冊	16件	15件	94%
上記以外 ^{*1}	1,529冊	9件	6件	67%
合計	22,656冊	37件	33件	89%

※1は、女子大学、中・高等科、女子中・高等科、初等科、幼稚園。
※2は概算。数値以外（「多数」等）が入力されている場合、文書ファイル以外（「段ボール箱」等）が入力されている場合、未入力の場合は1件1冊としてカウント。
※3は、小数点以下四捨五入。

事務共同倉庫内の文書ファイルの仮目録化

西5号館地下等の共同倉庫に納められた文書ファイルのうち、平成14年度以前に作成されたものについては私達で仮目録の作成に着手しましたが、各部署の協力も得て、平成28年12月時点で、法人部門と大学の事務部署が倉庫内に所蔵する殆ど（約8,000冊、簿冊以外を含むため概算、各部署が作成した管理簿と一部重複の可能性あり）を目録化しました。今後はこの仮目録を元に評価選別案を作成して移管に備えます。問題は、移管が決まった文書ファイルの受入れと選別に必要な施設（以下、「必要な施設」と表記）が未だ整備されていない一方で、各部署の倉庫が収容能力の限界に達していることです。この問題は目白、戸山、四谷の全ての地区で起きています。次項でこの問題への対策に触れます。

保存期間を満了した文書ファイルの評価選別

必要な施設整備までの暫定措置として、私達が各

部署に出向き、各部署が廃棄を希望する保存期間満了の文書ファイルを選別することにしました。この措置は平成27年度に会議体での承認を得ましたが、各部署では廃棄を希望したのに保存の対象となった文書ファイルを引続き預かることになり、正直に言えば抵抗を感じる人もいるはずですが、私達も、移管をせずに各部署や共同倉庫で記録の詳細を確認するのは困難で、廃棄には慎重になります。表2は、暫定措置により平成27年度に実施した評価選別結果を示しています。私達は、各部署での保存期間を満了した文書ファイルの2割程度を最終的に収蔵することを想定し必要な施設を検討していますが、平成27年度は選別対象全体の3割以上を保存の対象とした部署によっては4割～5割を保存の対象とした所もあります。

表2：暫定措置に基づく保存期間満了の文書ファイル評価選別実施状況
実施期間：平成27年4月～平成28年3月

評価選別実施事務部署数	文書ファイル数			保存率 ^{*2}	
	全体	保存	廃棄		
法人部門	6件	399冊	166冊	233冊	42%
大学	3件	699冊	195冊	504冊	28%
上記以外 ^{*1}	1件	133冊	56冊	77冊	42%
合計	10件	1,231冊	417冊	814冊	34%
平成26年度実績	2件	146冊	7冊	139冊	5%
累計	12件	1,377冊	424冊	953冊	31%

※1は、女子大学、中・高等科、女子中・高等科、初等科、幼稚園。
※2は、小数点以下四捨五入。

今後の計画と課題

学習院の次期中期計画では、今後のキャンパスプラン検討の中で、既述の必要な施設を含むアーカイブズ施設を確保し、院全体で文書・資料の保存や活用の効率化をはかることが課題のひとつに掲げられました。計画実現の暁には、文書ファイルのライフサイクルが構築され、学校業務全般の合理化と効率化が飛躍的に進むでしょう。文書ファイルの整理・管理に係る私達の当面の課題は、必要な施設が整うまで引続き対策を講じ、未来に引継ぐ記録の散逸を防ぐことです。

注：1 平成26年度以前の現況報告は、本誌Vol.5（平成27年2月20日発行）7～8頁に掲載しています。

（学習院アーカイブズ 井上素子）

主な活動 (2016年7月～2017年1月)

◆文書ファイルの整理・管理



文書ファイル整理作業

- ①各事務部署における文書ファイル管理簿の作成・更新
- ②西5号館地下倉庫の非現用文書ファイルの整理(2部署)
- ③各部署で保存期間満了となった廃棄希望文書ファイルの評価選別(6部署)
- ④大学学部学科事務室・附置機関等所蔵文書についての調査

◆文書・資料の調査・整理及び目録作成

- ①沼津游泳場移管資料の受入れ・調査(8～11月)
- ②計算機センター移管文書の受入れ・選別・調査(9月～)
- ③初等科資料展示室・倉庫所蔵資料の調査・選別(8月)
- ④女子部史料室・図書館所蔵資料の整理(8月)

◆史資料の調査・デジタル化・修復

- ①宮内庁宮内公文書館所蔵、学習院関係公文書の調査・デジタル化
- ②足踏式堅型自動ピアノの修理・調律と音源の収録(8月)



足踏式堅型自動ピアノ収録風景

- ③初等科勅額の修理状況見学と検討(8月26日・12月7日)

- ④「オール学習院書展」への安倍能成書の貸出(9月)



オール学習院書展会場

◆史資料の受贈・購入

- ①安倍能成書軸「千里之道始於一步」(7月)
- ②教職合宿報告集ほか教職課程履修学生の活動記録(9月)
- ③乃木希典書軸(山鹿素行『中朝事実』の一節、11月)
- ④学習院院歌CD(学習院アーカイブズ所蔵楽譜より萩谷克己氏作成、12月)
- ⑤「女学校すごろく」(明治42年、12月)

◆講演会・教育支援・広報支援等

- ①職員テーマ別研修講師「学習院の歴史を学ぶ」(8月18・19日)
- ②国立公文書館「アーカイブズ研修」での施設・所蔵資料紹介(9月28日)
- ③『学習院広報』、生涯学習センターパンフレット等への寄稿
- ④神奈川大学史研究会講師「人にやさしいアーカイブズ-大学史資料をどのように活用するか」(11月2日)
- ⑤社会・労働関係資料センター連絡協議会会員来室、施設・所蔵資料紹介(12月2日)
- ⑥学習院アーカイブズ講演会(安藤正人教授)開催(12月6日)
- ⑦韓国・慶北大学校人文大学史学科学生来室、所蔵資料見学(1月11日)

◆その他

- ①全国大学史資料協議会への参加、帝京大学(7月)・広島大学(10月)・印刷博物館(12月)

学習院アーカイブズ・ニュースレター第9号
2017(平成29)年2月20日発行

編集・発行 学習院アーカイブズ
Gakushuin Archives
〒171-8588 東京都豊島区目白1-5-1
TEL 03-5992-1285(直通)
事務室 西5号館(本部棟)地下1階
<http://www.gakushuin.ac.jp/ad/archives/>